刊行にあたって

混成アジア映画研究会は、混成性（混血性と越境性）に注目して、東南アジア映画を愉しむことを通じて東南アジア社会について知り、東南アジア社会への理解を深めることで東南アジア映画をさらに愉しむことを目指す研究会です。メンバーは映画や映像の専門家ではなく、東南アジアの各国を対象に、現地に長期滞在した経験があり、現地語と現地事情に通じている地域研究者です。

映画は19世紀末に発明されて世界各地に紹介されました。東南アジアの国々にも19世紀末には映画が紹介され、当初は王族や富豪などの限られた人たちの間でしたが、映画の鑑賞が始まりました。それからすぐに東南アジアの国々でも映画が作られるようになります。初めは外国人による制作でしたが、やがて地元の人たちによる映画制作が始まります。

東南アジアで最も早く地元の監督による映画が作られたのはフィリピンで、1919年にホセ・ネポムセノ監督が『田舎の乙女』を撮りました。したがって2019年にフィリピン映画は100年目を迎えたことになります。見方を少し変えれば、2019年は東南アジア映画にとっても100年目の節目ということもできるでしょう。

このように書くと、東南アジア映画というジャンルがあるのか、東南アジアのそれぞれの国に国別の映画があるだけで、東南アジア映画というジャンルはないのではないかと問われるかもしれません。

混成アジア映画研究会では、東南アジアの個別の国々の映画について研究を進めるとともに、東南アジア映画というジャンルはあるのか、もしあるとしたらそれはどのような特徴を持ったジャンルなのかという問いにも取り組んできました。本研究会がこれまでに刊行してきた『不在の父――混成アジア映画研究2016』や『母の願い――混成アジア映画研究2017』では、東南アジア社会の特徴の１つである「覚悟」という観点から東南アジア映画というジャンルについて考えてきました。

そこでは親と子の関係に注目して「覚悟」のあり方について検討しましたが、社会に関する「覚悟」を考えることもできるように思います。

社会には考え方が異なるさまざまな人がいます。個人がばらばらなことを言っていては社会全体の統制が取れないため、事情をよく理解している代表者が言うことにみんなが従い、そうすることで社会全体がよりよい状況になるという考え方があります。その過程で権利が制限される人が一部にいたとしても、社会全体のことを考えればある程度の不都合が生じるのはやむを得ないし、社会全体がよくなれば結果として個人も幸せになるという考え方です。

これに対して、個人の権利を尊重することこそが常に何よりも優先されるべきことであって、そのためには社会全体の秩序が一時的に乱れたとしても、さらには秩序が壊れたとしても、それはやむを得ないという考え方もあり得ます。

ここではどちらの考え方もやや極端に書きましたが、程度の違いはあっても、この２つの間の葛藤はどの社会にもいつの時代にも見られるものでしょう。どちらを選んでもよい面と悪い面があり、そのことを承知した上でどちらかを選ばなければならないという状況に置かれて、人は、そのどちらかを選ぶことを重ねてきました。東南アジアでも例外ではなく、この課題は社会のさまざまな事柄に反映されていて、映画ももちろんその１つです。このように考えて、今年度の『混成アジア映画研究』のテーマは「正義と忠誠」としました。

本書は混成アジア映画研究会の2018年度の研究内容をまとめたものです。本研究会では研究会Webサイトで作品レビュー等の記事を公開しており、本書に掲載された記事は研究会Webサイトの記事を再構成したものを含んでいます。

第１部は研究会メンバーによる混成アジア映画に関する論考です。今号のテーマは上でも書いたように「正義と忠誠」です。「正義」も「忠誠」もそれぞれいろいろな角度からの議論が可能ですが、ここでは正義や忠誠の概念について深く掘り下げるのではなく、このテーマに緩やかに関わりながら今の東南アジアの映画と社会に触れるような、素材やアプローチを多様にする論考を集めています。

第２部は、2018年３月に大阪アジアン映画祭との共催企画として国立国際美術館で行われた公開シンポジウム「茶房館から牌九を越えて――インドネシア華人映画の系譜と新展開」を採録したものです。『牌九』の主演女優でプロデューサーの１人でもあるイリーナ・チュウさんはインドネシア華人ですが、ドイツで生まれ育ち、中国語を話さず、自分の姓にあまりこだわりがないという意味で、私たちが一般的に考えがちな「中華文化」とほとんど縁がない生き方をしてきました。そのイリーナさんが、シディ・サレ監督と一緒に、インドネシア華人の暮らしを素材とした『牌九』を作った背景や苦労をお読みいただければと思います。

混成アジア映画研究会は、前身であるマレーシア映画文化研究会として活動していた時期を含めて、今年で設立から10年目を迎えます。2005年にヤスミン・アフマド監督の『細い目』を観た私は、現実のマレーシアでは「常識」に反する状況を描くことによって、今は存在しないかもしれないけれど存在してもおかしくない「もう１つのマレーシア」を描いたことが『細い目』の魅力だと思いました。

他のヤスミン作品を観るうちにこの思いは確信に変わり、ヤスミン作品をさらに愉しむためには、マレーシア社会の「常識」を理解した上でヤスミン監督がそれにどのように挑戦しているかを知るのがよいし、そうやってヤスミン作品を愉しむことを通じてマレーシア社会への理解が一層深まるだろうと考えました。

このように考えて、映画を通じたマレーシア社会の研究の可能性を考えるための最初の集まりを開いたのが2009年７月25日のことでした。偶然にもこの日はヤスミン監督が亡くなった日となり、私たちはマレーシア映画文化研究会として研究を続けることにしました。

マレーシア映画文化研究会メンバーが中心になって企画した『地域研究』の第13巻第２

号の「混成アジア映画の海」特集号では、日本を含むアジアの31の国・地域に通じた地域研究者にそれぞれの国・地域の映画と社会について寄稿していただきました。このうち東南アジアの国々について寄稿した人たちが加わることで、マレーシア映画文化研究会は対象をマレーシアから東南アジア全体に広げた混成アジア映画研究会になりました。

混成アジア映画研究会は、東南アジアの映画を対象として、日本語字幕の作成、上映会・シンポジウムの開催、映画と社会に関する記事執筆などを行っています。

日本語字幕の作成については、日本で未公開の作品を含めて、研究会メンバーがそれぞれ紹介したいと思う映画を選び、社会・文化的背景などを踏まえて日本語字幕を作成しています。これまでに、ヤスミン作品のほか、『イロイロ』(シンガポール)、『天国への長い道』(インドネシア)、『ベアトリスの戦争』(東ティモール)、『12人姉妹』(カンボジア)、『プラロットとメーリー』(タイ)、『不即不離』(マレーシア／台湾)などの作品の字幕を作成しました。

日本語字幕を作成した作品は、国際交流基金アジアセンターと共催の上映会・シンポジウムや、京都大学ビジュアル・ドキュメンタリー・プロジェクト(VDP)と共催の上映会などで上映とディスカッションを行っているほか、学会や大学による上映会にも提供しています。

上映会・シンポジウムについては、マレーシア映画文化研究会から引き継いで、毎年７月末にヤスミン監督追悼の上映会「わすれな月」を京都で開催しています(「シネマレーシア」の開催に協力した2013年と「マレーシア映画ウィーク」の主催組織の１つとなった2015年は京都での上映会は行いませんでした)。また、毎年３月には大阪アジアン映画祭との共催で公開シンポジウムを開催しています。

映画と社会に関する記事の執筆については、毎年１月と７月に研究会メンバーによる「いま語りたい映画」を研究会Webサイトで紹介しているほか、毎年３月の大阪アジアン映画祭に合わせる形でディスカッションペーパーを刊行しています。『たたかうヒロイン――混成アジア映画研究2015』以来、『不在の父――混成アジア映画研究2016』、『母の願い――混成アジア映画研究2017』、そして本誌の『正義と忠誠――混成アジア映画研究2018』をこれまで刊行してきました。研究会結成から10年目の節目となる2019年には、これまでの記事執筆を踏まえて、別の形での研究成果の出版も計画しています。

ここに挙げたもの以外を含めて、本研究会の活動は混成アジア映画研究会Webサイトで紹介していますので、あわせてご覧いただければ幸いです。

混成アジア映画研究会の公開シンポジウム・セミナーの開催にあたっては、国際交流基金アジアセンター、大阪アジアン映画祭、国立国際美術館のご支援を賜りました。研究会の活動にご理解とご協力を下さっている機関や方々に感謝申し上げます。

京都大学東南アジア地域研究研究所
山本 博之